

Pudd'nhead Wilson に見る 世紀末アメリカへの警告

— Pudd'nhead Wilson の “finger-prints” を視点として —

山 本 祐 子

序

小説 *Pudd'nhead Wilson*¹ における主人公 Pudd'nhead Wilson は、Hannibal で “chucklehead” のあだ名で呼ばれていた弁護士 Samuel Taylor Glover をモデルとしているのではないかとされている (Rasmussen 176-77)。しかし Gillman によれば、Pudd'nhead Wilson が指紋を使って科学的な犯罪捜査を進める姿は、当時流行していた探偵小説の主人公、Conan Doyle の Sherlock Holmes に似せて描かれていたことになる (Gillman, *Dark Twins* 86-87)。また Pudd'nhead Wilson が南北戦争以前の奴隷制社会で辿った数奇な人生は、作者 Mark Twain 自身が若き日に味わった体験を基にしているとも考えられる。² これらからも分かるように Pudd'nhead Wilson のモデルを誰と捉えるかによって、全く異なる視点から考察していくことができる。そこで本論では、これまでとは違う新たな視点から Pudd'nhead Wilson を問い直すため、Twain がその研究に関心を寄せていたアメリカ鳥類学の先駆的科学者 Alexander Wilson を Pudd'nhead Wilson の重要なモデルの一人と考え、その視点から考察したい。³ そうすることで、作者 Twain が Pudd'nhead Wilson という人物を通して読者に伝えようとした真意を探り、小説 *Pudd'nhead Wilson* を再考できると考えるからだ。

鳥類学者 Alexander Wilson は1766年にスコットランドに生まれ、28歳の時にアメリカに移民してきている。彼は新天地アメリカにおいて各地を転々としながら貧しく恵まれない生活を送り、結婚することもなかった。また彼はスコットランドでは名の知れた詩人であったが、アメリカにおいて彼の作品が評価されることはなかった。しかも彼はアメリカに来て以来20年近くにわたって手がけてきた鳥の研究が認められ、ようやく栄光を手にしようとした矢先、47歳で亡くなる。⁴

この鳥類学者 Alexander Wilson の生まれ、経歴をざっと見ても、Pudd'nhead Wilson と実によく似ていることが分かるはずだ。Pudd'nhead Wilson もまたスコットランド系であり、25歳のときに Dawson's Landing という見知らぬ土地に腰を下ろし、そこで村人達に馬鹿にされながら、結婚することもなく、つつましい生活を送っていた。彼が密かに書き貯めてきた暦“Pudd'nhead Wilson's Calendar”もその真価を認めてもらうには後世の研究者、読者を待つほか無かったのである。しかし Pudd'nhead Wilson もまた20年以上にわたって手がけてきた“finger-prints”の研究が功を奏し、48歳にしてようやく地位と名誉を手にするが、それと同時に物語の幕は下ろされるのである。

こうした Alexander Wilson と Pudd'nhead Wilson の生まれや経歴よりもまして関心を引くのは、彼らが心血を注いでいた研究への取り組み方である。Alexander Wilson は教師や行商人あるいは版画家としてなんとか暮らしを支え、その合間を縫ってはまだよく知られていない鳥たちをアメリカ全土にわたって追い求め、研究していった。彼が45歳の時にスコットランドの友人に宛てた手紙には、アメリカでの暮らしぶりを次のように書いている。

I was a wanderer when I was in Scotland, and I have been much more so since my arrival here. Few Americans have seen more

of their country than I have done, and none love it better. Fortune has not yet paid me up all her promises, after all the wild goose chase she has led me; but she begins to look a little more gracious than usual, and I am not without hope. Twenty years of disappointment have only whetted my appetite for independence (qtd. in Hunter 393)

Alexander Wilson はアメリカ社会から認められることなく、また社会のなかに安住することもできず、絶えず鳥を追い求めては森から森を渡り歩く“wanderer”であった。だがこうして Alexander Wilson は、全9巻にもおよぶ *The American Ornithology* において膨大な種類の鳥たちを考察し正確に記録していったのである。また彼は版画家でもあったため、鳥たちの精巧な絵姿を版画に残し、それらを彼の著書に数多く約めている。⁵

Pudd'nhead Wilson も Dawson's Landing という社会に移り住んで以来そこで愚か者として蔑まれ続け、それゆえ弁護士でありながら土地測量士や会計士として細々と暮らす日の当たらない人生を強いられていた。このように Pudd'nhead Wilson は社会生活での華やかな舞台からは完全に閉め出され、有り余る孤独な時間をひたすら指紋を収集しては、記録し考察することに費やしたのである。すなわち Alexander Wilson と Pudd'nhead Wilson は二人とも社会から認められず一人孤独に、片や鳥、片や人間の“finger-prints”という小さな対象を懸命に追い求め、それらを正確に記録し考察することだけに20年という長い年月を費やしたのである。

2

しかも彼らがひたむきに追い求めてきた鳥あるいは“finger-prints”は、彼らにとって単なる科学的な研究材料ではなかった。 *The Atlantic*

Monthly の1878年7月号では、Alexander Wilson の詩や散文に加え、彼の鳥に関する評論や手紙を収録した著書 *The Poems and Literary Prose of Alexander Wilson, the American Ornithologist* (Ed. Alexander B. Grosart. 2 vols. Paisley: Alexander Gardner, 1876) を紹介している。そしてその記事では、この本を読むことで、アメリカの遺産とも言える高名な鳥類学者 Alexander Wilson の実像が窺え知れるとし、次のようにも述べられている。

Indeed, it would be safe to say of the entire work that it appeals quite as forcibly to the general reader as to the ornithologist, for Wilson's own interest was human rather than professional or strictly scientific. He gives the necessary scientific descriptions, but it is plain that he looked upon every bird which he watched, or mounted, or drew, as an individual, and not as a "specimen;" and therefore his interest was strong in its habits, manners, appearance, and history. (*Atlantic Monthly* 123)

Alexander Wilson が一羽一羽の鳥たちを "individual" すなわち「唯一の個性」として人間的な視点で見つめていたからこそ、鳥たちの立場から人間の姿を見つめ直せたことも、この記事では紹介されている。そして Alexander Wilson が鳥の視点から人間達の姿を見つめ直すと、人間はひどく偏狭で横暴に映っていたことも付け加えられている。

Mark Twain's Notebooks & Journals によると、Twain はこの Alexander Wilson に関する記事を1878年の出版当時に実際に読んでいて、彼について "See what an intense life was that Scotch naturalist's!" (Anderson 135-36) という簡単なコメントを書き残している。ところで Twain がこの Alexander Wilson に関する記事を目にしたのは、ちょう

ど友人の Joseph Hopkins Twichell とともにドイツを旅しながら題材を集め、*A Tramp Abroad* (1880年出版) を執筆しようとしていた時期であった (Anderson 113-15)。こうした関係もあって、ここであえて注目したいのが、*A Tramp Abroad* 第3章に挿入されている、かの有名な物語 “Baker’s Blue-Jay Yarn” である。というのも先の記事で紹介されていたように Alexander Wilson が鳥をも「唯一の個性」として人間的な視点で見つめていたが、その姿は “Baker’s Blue-Jay Yarn” における語り手 Jim Baker が blue-jay を見つめる姿と重なるからだ。Baker は人里離れた鉱山で独り暮らしをしているうちに、動物達の言葉を理解できるようになったという人物で、ある日目にした一羽の blue-jay をまさに「唯一の個性」として捉え、人間味あふれる姿を見だしていく。

というのも Baker は、一羽の blue-jay がまるで意固地な人間のごとく屋根板にあいた不思議な節穴にこだわり、その節穴になんとしてもドンダリを貯めようとして四苦八苦する姿や言動を、いかにも目の前で見ていくのごとく詳細かつ生き生きと語っていくのだ。そしてしだいに読者も Baker の tall tale に引き込まれ、節穴にこだわる滑稽な blue-jay の姿を思い描いて、思わず笑みがこぼれてくるにちがいない。そこへ他の blue-jay 達も無数に集まってきて次のように物語は展開する。

Every jay in the whole lot put his eye to the hole and delivered a more chuckle-headed opinion about the mystery than the jay that went there before him. They examined the house all over, too. The door was standing half open, and at last one old jay happened to go and light on it and look in. Of course that knocked the mystery galley-west in a second. There lay the acorns, scattered all over the floor. He flopped his wings and raised a whoop. ‘Come here!’ he says, ‘Come here, everybody; hang’d if this fool hasn’t been trying to fill up a house with

acorns! (*Twain, A Tramp Abroad* 41)

ここでは blue-jay が節穴にこだわり、小さな節穴からしか物を見ようとせず、結果として盲目となっていた愚かさを笑っているのである。それと同時に、節穴にこだわる blue-jay の滑稽さに目を奪われて、この人を小馬鹿にした結末を予想だにしていなかった読者自身が、語り手の巧みな話術にはまり笑われる側に立たされていたことに気づくのである。愚かな blue-jay が小さな節穴だけを一途にのぞき込むように、読者である人間達もまたひどく狭い視野でしか物を見ておらず、ことの真相に気づきもしないのだと笑われるのだ。ところが物語の屋根の上に集まってきた他の blue-jay 達は、地上に縛られ狭い視野しか持たない人間達とは対照的に、自由に飛び回っては広い視野で小屋を見て回り、結果として節穴の謎を解き明かし、ことの真相を突き止める。Twain は一羽一羽の blue-jay を「唯一の個性」として人間的に描き出すことで、鳥が大空を飛び回り広大な視野でもって物事を見通していることに気づかせ、そして鳥の視点から見れば人間がいかに偏狭に映るかを仄めかすのである。

3

鳥類学者 Alexander Wilson, あるいは“Baker’s Blue-Jay Yarn”の Baker は人間社会から離れて一人森のなかに入り、人間達が取るに足りないと考えてきた鳥達をも「唯一の個性」として見据え探究してきた。それゆえ彼らは鳥という全く異なる視点から、偏見に縛られずに人間を見つめ直すことが出来たのである。それと同様に、Pudd’nhead Wilson は人間社会の華やかな舞台からは閉め出され、独り家に閉じこもっては、人々が気にも留めなかった“finger-prints”を個々の人間に備わっている重要な「個性」の一つとして見据え、探究してきた。だからこそ彼は“finger-prints”という視点を通してそれぞれの人間を「唯一の個性」として見つめ直し、何にも捕われない人間本来の姿を問い直すことが出来たのである。

というのも *Pudd'nhead Wilson* の説明によると、“finger-prints” は人間が生まれながらにして個々別々に身につけている “physical marks” (286) であり、世界中に一つとして同じものはないとして、次のように続ける。

There is hardly a person in this room, white or black, whose natal signature I cannot produce, and not one of them can so disguise himself that I cannot pick him out from a multitude of his fellow-creatures and unerringly identify him by his hands. And if he and I should live to be a hundred I could still do it. (291)

“finger-prints” には黒人、白人といった人種や、外見上の特徴や装い、あるいは地位や名譽は全く関係ない。*Pudd'nhead Wilson* は “finger-prints” を通して、世界にたった一人しか存在しない人間を捜し当てる。つまり彼は “finger-prints” を通して見ることで、表面的あるいは社会的な仮装をはぎ取り、何にも捕われず一個の人間としてのあるがままの真実を探し当てるのである。

実際に *Pudd'nhead Wilson* は “finger-prints” を通して Judge Driscoll を殺した人間の正体、すなわち偽 Tom の真実の姿を突き止めることになる。そしてその経緯が第20章では偽 Tom を「一羽の小鳥」に喩えて説明されている。*Pudd'nhead Wilson* は Judge Driscoll を殺した真犯人が、現場近くで目撃された女性と関わりがあると思ひこみ、女性の指紋を懸命に調べていく。しかし現実にはそれは、偽 Tom が Judge Driscoll を殺害した後、女装をして逃亡していたのであった。偽 Tom は、変装によって自らの犯罪を完全に隠し通したと確信し、次のように思うのである。

“Nearly always in cases like this there is some little detail or

other overlooked, some wee little track or trace left behind, and detection follows; but here there's not even the faintest suggestion of a trace left. No more than a bird leaves when it flies through the air - yes, through the night, you may say. The man that can track a bird through the air in the dark and find that bird is the man to track me out and find the Judge's assassin - no other need apply. And that is the job that has been laid out for poor Pudd'nhead Wilson, of all people in the world!" (271)

この言葉にある通り、Pudd'nhead Wilson は残されていた“finger-prints”を手がかりに「一羽の小鳥」、すなわち偽 Tom の正体を突き止めるのだ。Alexander Wilson は偏狭な人間社会から離れて、一羽の小鳥をも「唯一の個性」として見つめ、真摯に追い求めてきた。まさにそれと同じように Pudd'nhead Wilson も偏見に縛られた人間社会から一人離れ、“finger-prints”を手がかりにそれぞれの人間を「唯一の個性」として見据え、探究してきた。だからこそ 外見や地位、人種や性別、年齢などの仮装に目を奪われず、あくまで一個の人間としての本来の姿、正体を見通すことができたのである。すなわち村人達が偽 Tom を有力者の後継者として一目置き、疑うことすらしなかったなか、Pudd'nhead Wilson だけは偽 Tom が金のために Judge Driscoll を殺した男であり、黒人奴隷 Roxy の息子 Chambers という隠されたもう一つの“self”を突き止めるのだ。

4

Pudd'nhead Wilson が人間を「唯一の個性」として見つめ直し人間の本質を鋭く洞察したのとは対照的に、Dawson's Landing の村人達は奴隷制を基盤とした社会の枠組みのなかでしか人間を判断することが出来な

くなっていた。Dawson's Landing では、白人と黒人双方の血を受け継ぐ偽 Tom を、あくまで黒人奴隷として扱う。その理由を Susan Gillman は次のように説明している。

Mulattoes blurred the clear separation between the races essential to American race slavery, and miscegenation was thus perceived as a threat to a biracial society. Particularly threatening to this two-part order were the "free persons of color," most of whom were mulattoes. "We should have but two classes," declared one grand jury deliberating the expulsion of the "free colored" from South Carolina in the late 1850s, "the Master and the slave, and no intermediate class can be other than immensely mischievous to our peculiar institution." The grand jury testimony verges on acknowledging the contradiction that this "intermediate" group - an "abominable mixture," neither white nor black, slave nor free - violates the logic of the institution that produced it and therefore must be suppressed. (Gillman, "Sure Identifiers" 91-92)

上記にあるように、奴隷制社会では白人と黒人、言い換えれば "master" と "slave" という二つの階級から成り立っている。そのため黒人と白人の混血は "master" と "slave" の境界線をぼやかし、ひいては奴隷制度を崩壊する恐れがあると危惧され、受け入れられなかったのである。こうした背景から、アメリカでは植民地時代から受け継がれてきた独自の "descent rule" において、白人と黒人の混血児をも黒人と定めていた。そしてこの "descent rule" が南北戦争までにより明確化され、 $1/4$ あるいは $1/8$ だけでも黒人の血が流れるものを黒人奴隷と独断的に定めるようになる (Gillman, "Sure Identifiers" 90-91)。そして Dawson's

Landing においても “a fiction of law and custom”(33) すなわち「法と慣例」により、1/32だけ黒人の血を引く偽 Tom をも自動的に黒人奴隷とするのである。すなわち、Dawson’s Landing においても奴隷制度を維持するため、当人の人格や資質には関係なく、「法と慣例」に基づいて機械的に “master” と “slave” に区分けされていく。その結果、外見は白人と変わらず、多分に白人の血を受け継いだ偽 Tom まで “slave” と定められてしまう。そしてそれがいかに不自然で非情であろうとも、村人の誰一人として意に介さない。これらからも分かるように、村人達は奴隷制度を絶対視し、その奴隷制度のもとに作られた “master” と “slave” という分別を通してしか、物事を見ることも、人間を判断することも出来ないのである。彼らはもはや、個々の人間がその内にいかなる本性を宿しているかを気かけようとしもないのだ。だからこそ Roxy が赤ん坊を取り替え、本物の Tom と偽物の Tom すなわち “master” と “slave” がすり換わっても、村人の誰一人、いや実の父親ですら気づかないという愚鈍ぶりを露呈するのである。

そうした村人達の姿を象徴的に表しているのが、村の最有力者 Judge Driscoll である。Judge Driscoll は Virginia における旧家の出身であり、First Families of Virginia すなわち F. F. V. と呼ばれていて、村では貴族にも値する特権階級に属していると説明された上で、次のように述べられる。

It [F. F. V.] had its unwritten laws, and they were as clearly defined and as strict as any that could be found among the printed statutes of the land. The F. F. V. was born a gentleman; his highest duty in life was to watch over that great inheritance and keep it unsmirched. He must keep his honor spotless. Those laws were his chart; his course was marked out on it; if he swerved from it by so much as half a point of the

compass it meant shipwreck to his honor; that is to say, degradation from his rank as a gentleman. (156)

こうして Judge Driscoll は F. F. V. としての地位と名誉を守るため、F. F. V. の法に基づき Count Luigi と決闘することになる。しかしこうした Judge Driscoll の姿がもはや滑稽でしかないことは、*Those Extraordinary Twins* 第6章に於いて示されている。というのも Judge Driscoll は Luigi と決闘するものの、銃弾を受けたのは決闘した当事者ではなく、その付き添い人ばかりであった。Pudd'nhead Wilson にとってそれはひどくばかばかしく思えるのだが、Judge Driscoll と Pembroke Howard はまじめな顔で「やむを得ない」と言い切る。なぜなら彼らの論理によると、「code」によって立つ位置が決められているため、銃弾をよけるためであっても、立ち位置を変えることは法的に認められていない。「code」を破ることだけはいかなる場合でも許されない。」(405) からだ。この様に Judge Driscoll は F. F. V. の法や“code”に従うことで、自分ばかりか他人の命まで危険にさらすことを何とも思わないのだ。またそうした自分の愚かさにすら気づかないのである。

すなわち Judge Driscoll を筆頭として村人達は、F. F. V. に“master”と“slave”，あるいは白人と黒人といった表面的な肩書きや容姿にこだわり、それらを通してしか物事を見ようとしない愚か者に成り下がっていた。その結果村人達は、F. F. V. の豊かな白人という偽 Tom の表面的な姿を盲信して、その内面までは見通せない。偽 Tom が盗みや殺人を犯すとき、白人女性や老女あるいは黒人に変装して外見を偽るだけでまんまと村人達を欺くことができたのも、村人達が表面的な姿でしか見ていないことの証と言える。しかし Pudd'nhead Wilson だけはすでに述べてきたように、外見などに捕われず、“finger-prints”を通して一個の人間としてあるべき本来の姿を探し求めた結果、偽 Tom の隠された素顔を突き止め、彼の犯行に気づくことができた。それと同時に Pudd'nhead Wilson は、

おごり高ぶる村人達こそが人間の表面的な姿しか見えない “pudd’nhead” であったという実体をも暴き伝えているのだ。

結論

こうした Dawson’s Landing における悪弊は *Pudd’nhead Wilson* が執筆された1890年代になっても引き継がれ、人間は “one drop rule” や州法のもと白人と黒人とに理不尽に区別され、不当に差別されていく。アメリカ人は世紀末に至っても人種や性別、あるいは社会的な地位や階級といった表面的な仮装にのみこだわるあまり、それぞれの人間が内に抱く本質に目を向けず盲目となっていたのだ。そこで鳥類学者 Alexander Wilson が鳥を通して人間の姿を見つめ直すように、Twain は Pudd’nhead Wilson の “finger-prints” という社会の偏見に縛られない新たな視点を通して一個の人間としての本来の姿を見つめ直させようとしたのである。こうして Twain はアメリカ社会の病巣を暴くとともに、人間性の回帰を訴えようとしたのではないだろうか。

本論文は、日本マーク・トウェイン協会第5回研究発表会（於 盛岡市福祉勤労会館，2001年10月12日）において口頭発表したものに加筆修正したものである。

Notes

- 1 Twain, *The Tragedy of Pudd’nhead Wilson and The Comedy Those Extraordinary Twins*. 以後この書からの引用はすべてこの版によるものであり、引用文の末尾には（頁数）を付記する。ただしこの書は *Pudd’nhead Wilson* と *Those Extraordinary Twins* という二つの小説が対になって収められているため、前者を *Pudd’nhead Wilson*、後者を *Those Extraordinary Twins* と区別して明記する。
- 2 例えば McWilliams によると、Twain は Jacksonian Democracy の時代にホイッグ党の村で育ち、父親もホイッグ党員の裁判官であったが、後に生

まれ故郷を離れて民主党系の新聞社で働いたことで一転して民主党への強い関心を寄せるようになる。Twain が経験したこの大きな転換は、*Pudd'nhead Wilson* の舞台となった Dawson's Landing の村人達にも起こる。そのなかで Pudd'nhead Wilson は民主党推薦による最初の市長となるのだ (McWilliams, n3 247)。

- 3 鳥類学者 Alexander Wilson と Pudd'nhead Wilson との関係についてはこれまで論じられたことがないため、より大きな意義があると言える。
- 4 Alexander Wilson に関する詳しい記録は、*The Encyclopedia Americana* と Hunter の *The Life and Letters of Alexander Wilson* を参照。
- 5 Alexander Wilson の偉業はこの *The American Ornithology* 全 9 巻に凝縮されていると言える。*The American Ornithology* の改訂版は幾つか出版されていて、Twain の生存中に出版された版は Alexander Wilson and Charles Lucien Bonaparte, *The American Ornithology*, 3 vols. (Philadelphia: Porter & Coates, 1871) である (Hunter 439)。また現代においても Alexander Wilson に関する書物や、彼の版画を編集した本を入手することができる。

Works Cited

- "Alexander Wilson." *The Encyclopedia Americana*. 1977 ed.
- Anderson, Frederick, Lin Salamo, and Bernard L. Stein, eds. *Mark Twain's Notebooks & Journals*. Vol. 2. Berkeley, Los Angeles and London: U of California P, 1975.
- Gillman, Susan. "Sure Identifiers." *Mark Twain's Pudd'nhead Wilson: Race, Conflict, and Culture*. Ed. Gillman and Robinson. Durham and London: Duke UP, 1990. 86-104.
- - -. *Dark Twins: Imposture and Identity in Mark Twain's America*. Chicago and London: U of Chicago Press, 1989.
- "Grosart's *The Poems and Literary Prose of Alexander Wilson, the American Ornithologist*." *Atlantic Monthly*. July 1878. 18 Sep. 2001
http://cdl.library.cornell.edu/moa/moa_browse.html
- Hunter, Clark, ed. *The Life and Letters of Alexander Wilson*. Philadelphia: American Philosophical Society, 1983.
- McWilliams, Wilson Carey. "*Pudd'nhead Wilson* on Democratic

山 本 祐 子

Governance.” *Mark Twain’s Pudd’nhead Wilson: Race, Conflict, and Culture*. Ed. Gillman and Robinson. Durham and London: Duke UP, 1990. 177-189.

Rasmussen, R. Kent. *Mark Twain A to Z: The Essential Reference to His Life and Writings*. New York: Facts On File, Inc., 1995.

Twain, Mark. *The Tragedy of Pudd’nhead Wilson and the Comedy Those Extraordinary Twins*. Ed. Shelley Fisher Fishkin. New York and Oxford: Oxford UP, 1996.

- - -. *A Tramp Abroad*. Ed. Shelley Fisher Fishkin. New York and Oxford: Oxford UP, 1996.